



行政と市民の関係を創造する NPO 法人 きょうと介護保険にかかわる会

発行人 梶 宏 〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町 3-20 賀陽コーポラス 809
TEL・FAX:075-821-0688 E-mail:npokakawarukai@helen.ocn.ne.jp

会報
107 号
2019/8/2

不安いっぱい年金制度

理事長 梶 宏



この国の労働者に対する年金制度を政府がつくったのは、中国への侵略戦争が長引いたため税金を増やしたいが、増税すると国民の不満を呼ぶためそれに代わって、給与生活者を甘い餌で釣っての、戦費調達が目だった。資金は入ってくるが給付は 20 年後だし、年金制度ができることに異論が出るはずもなかった。

敗戦後は、貯まった資金を大蔵省の資金運用部で、公共事業に投資され、高度成長をバックアップしたといえる（グリーンピアを作ったりして無駄遣いもしたが）。この時期、政府は積立方式をとっていると称し、労働組合は、賦課方式に変えて給付額を上げろと主張していたものだ。

このままではどうなっていくのか、間もなくこの世におさらばする我が身ではあるが、心配でならない。先般の参院選投票率は史上 2 番目の低さだった。年寄の身としては、自分さえ良ければいいと言うのではなく、若い人々とこの国のかたちをどうするのか、話し合う機会をもちたいと思うのだが。

第 98 回 研修会報告 あなたの年金はどうなる？

- 6 月 15 日（土）13:30～16:30
- ひと・まち交流館京都 第 5 会議室
- 講師 唐鎌直義氏
立命館大学産業社会学部
現代社会学科特任教授
- 参加者：22 名



1. 日本の公的年金制度の

特異性と成立過程

① 成り立ち

わが国の年金制度の始まりは明治期の軍人と官吏の恩給令として発令され、限られた一部の上流階級のためのものだった。

1941 年労働者年金保険法により一般労働者が年金加入し、1944 年に（旧）厚生年金法ができる。だがこれは、戦争遂行のための戦費調達が目的だった。

年金の仕組みは複雑で、多々改変されて将来的に先が見えにくい、理解しづらい敬遠されがちなテーマですが、老後の生活保障にはなくてはならない大事な課題です。まず年金の歴史的経過をたどりながら、今日の年金の現状やあり方を学び、考える研修会となりました。

② 国民皆年金計画（1959年）

戦後、1953年 私学共済法に続き、ほぼ毎年、(新)厚生年金法、市町村職員共済法、公共企業体職員共済法、国家公務員共済法、農林漁業団体共済法、そして最後の年金制度として国民年金法を1959年に制定、1961年に施行し、すべての国民が「皆年金」となる。

③ 基礎年金制度への移行（1985年）

1974年、年金ストライキを機に物価スライド制・賃金スライド制を導入し、給付額を引き上げ。1975年社会保障制度審議会の「基本年金構想」では制度の一元化、1人月5万円、夫婦10万円の基本年金の支給とし、付加価値税を財源に充てる。

1985年「基礎年金制度」へ移行し、翌1986年に実施（1961年から25年）した。一階部分の統合、専業主婦の年金権の承認、そして年金支給開始年齢の65歳への繰延べが提起され、60歳定年で5年間は空白期間となることになった。



④ 近年の動向（5年ごとに年金財政再計算を行い、改革案を提起する）

1989年 20歳以上の大学生の強制加入（親が支払う）、完全物価スライド制に移行。1994年には、2001年から2013年にかけて厚生年金の定額部分の支給開始年齢の65歳への段階的繰延べを実施（女子は5年遅れで実施）。可処分所得スライドへ変更して、ボーナス時に1%の保険料を徴収（年金には反映されない）することになった。1999年には厚生年金の報酬比例部分の一律5%カット、2013年から報酬比例部分の支給開始年齢を65歳に段階的に繰延べ、可処分所得スライドを凍結（廃止）。

大学生の保険料納入に猶予期間（10年まで）を設定する（追納）など、年金の改悪が顕著になる。

2. 公的年金制度の現状

2004年には、保険料を厚生年金で18.30%（2017年）、国民年金で16,900円へ段階的に引き上げて固定する「保険料固定方式」と年金額の給付水準を引き下げる「マクロ経済スライド制」を導入する政策を提起する。

この時に「100年安心」と唱え（坂口厚労相）、有限均衡方式への転換と積立金の確保によって100年後に年金保険料収入の総額と年間年金給付総額と積立金総額が100兆円で均衡（一致）するように制度設計したが、少子高齢化の進捗状況を見通すことができず、誤ってしまった。

・今回の金融庁の老後2000万円が必要という報告書は固定化した保険料を再び上げるという意思表示と見るべきだ。2004年の試算が15年で破綻したということだろうか。すなわち、2000万円貯めるか、保険料上げるかのどちらかだと既成事実化し、保険料を上げるための地ならしをしている。

・日本の年金積立金は170兆円、単年度の年金給付は50兆円だから、帳簿上3.4年分になるが、実際はどれくらいあるのかブラックボックス化され、官僚にしかわからない。年金の積立金はGPIF（年金積立金管理運用独立行政法人）が管理運用し、大企業の株価を下支えする株価対策として使われ、運用損が出て誰も責任を取らない仕組みになっている。

・年金は積立方式か賦課方式かはいろいろ主張があり、両方の組み立てになっている。

結語として、年金は制度の問題ではなく、政治の問題だ！ 政治を変える → 裁判よりデモを！ と講師は締めくくられた。

（田村権一 記）

第99回 研修会 報告

上京区におけるデイサービス事業と ネットワーク「ささえ愛の会」

- 日 時：7月20日（土）13：30～16：30
- 会 場：ひと・まち交流館京都 第5会議室
- 講 師：本浪 尚氏（有）デージー・ヒル取締役社長
 デイサービス・ホームヘルプ「ひなぎくの丘」経営
- 参加者：20名



ラフなスタイルで登場した講師のお話は、最初に自己紹介から始まった。テレビ制作会社勤務を経て、教育関連企業に転職、27歳の時に難病にかかり、40歳手前で退職。実家が上京区にあり、その遊休地を活用して、2002年4月、デイサービス施設「ひなぎくの丘」を創設。自身の病気体験を糧に、無謀にも介護の世界に飛び込んだということであった。

1. 開所して1年目に遭遇した4例の介護の実際と経験を通して気づいたこと

Fさんは男女の識別さえ困難な薄暗いごみの山の部屋で、一人暮らし、生活保護受給。最初にデイサービスを勧めに訪問した時のこと。怒鳴られながらも根気よく寄り添うように2時間話し込む。入浴は年単位。「そんなにいうのなら行くわ」で始まった。その人の来し方や生活にしっかりとかわることで強い信頼関係が生まれることに気づく。認知症が進行したFさんを施設に見舞いに行った帰り際に「気をつけて帰りや」と。講師はにこっと笑顔。

2. このような経験から、介護に関して素人ではあったが、様々な気づきがあった

外から見ていたことが中に入ると実際は違うということ。様々な立場の方の意見やアイデアを総動員して対応することで事態が変遷するという。一旦法律を忘れて最善を考える事による気づき、等々。

3. 2009年「ささえ愛の会」の結成宣言

上京区内の通所介護・小規模多機能事業所等の事業者の有志が集まり会を立ち上げた。会の願いは①地域の皆さんの困りごとや悩みの相談窓口としてお役に立つこと②福祉や介護の専門職が集まる会として地域に役立つ活動をする③地域のみなさんと共に街づくりに取り組むことの3つとし、これを宣言した。最初14の事業所が今では36事業所に。京都市内の他の行政区にはなく、全

国的にも珍しい活動として高く評価されている。認知症を地域に理解してもらいたいという願いでスタートし、今では多くの事業を展開している。

4. 活動と10年間の歩み

昨年4月にオリジナルのノボリを製作し、各事業所に掲げよろず相談を開始した。ちょっとした悩みや不安を自宅周辺で聴いてもらえると評判。オレンジカフエ上京の運営、事業所の垣根を超えた職員研修、きれいなホームページ。ロゴマークを各事業所の送迎車に掲示するなど活動の見える化、年度ごとの報告書の作成等事務局体制をつくり取り組んでいる。

5. 長く続くその要因は？ 小規模の事業所のよさを発揮

会がみんなで面白く長く続けられている理由は、会費はとらない、緩やかなルールで運営していることにある。ささえ愛の会宣言（理念）のもと、事業所間の連携もよく、地元を愛する熱い人間の存在があること、利用者や民生委員など地域の声をよく聞き、パンフレットやホームページが広く地元の横のつながりに役立っていることなどがあげられる。講師自身は会の発起に携わったが、あくまでも黒子の存在と謙遜されているが、地元に根を張り、時代を見つめ、やんわりとみんなを包み込む大きな存在とお見受けした。

「介護報酬など厳しい運営の話はさておき」と深く話されず脇に置かれたままであった。

（中川慶子 記）

「介護保険市民オンブズマン機構大阪（^{おー}ネット）」のセミナー参加報告

〇-ネットとの出会い

〇-ネットについては、以前からその名称に介護保険がついているし、市民オンブズマンという言葉からも、私たちの組織との関連性を感じていました。ちょっと気になって〇-ネットのHPを見ると、その歩みとして「介護の社会化を進める1万人市民委員会・関西」の運営委員3人を中心に立ち上げたというくだりが、どこかで聞いたような・・・ということで勝手に親しみを感じつつ、〇-ネットのフェイスブックをフォローして、時々その情報を拝見していました。

フェイスブックで6月30日に第58回の〇-ネットセミナーが開催されること、そのテーマが「認知症とともに生きる人たちの人生を支える」であることを知り、家族に認知症高齢者がいる私は興味があったので参加することにしました。ついで！に〇-ネットについても情報を収集してこようという狙いもありました。このセミナーは14:30からでしたが13:00から〇-ネットの定期総会があり、それに引き続く市民向けセミナーというあたりもなじみ深い感じでした。

重度認知症の人は、意思のない「物」か？

セミナー講師はいまいせ心療センター副院長の水野裕さん。認知症ケアの理念「パーソン・センタード・ケア」の第一人者であり、実践のための教育資格を日本人で初めて取得されたとのこと。重度、進行した認知症になったら「自分の人生を生きる」資格はないのか？ “今”の本人の世界を先入観なしで見つめ、とらえ、支えることが、家族や介護者に求められるのではないのか？という問いかけは心に響きました。「事実と異なる」「合理的でない」で本人の世界を否定しない、認知症になってからのその人の希望を尊重することの大切さ。父を「認知症を患った病人」ではなく「認知症とともに生きる人」と見ることで、私

自身の父への接し方も変わるのではないかと感じたのは新鮮でした。「パーソン・センタード・ケア」についての著書も出版されているとのことなので読んでみたいと思いました。

〇-ネットの市民オンブズマン活動

セミナー会場の入り口には〇-ネットが発行された資料が販売されていました。〇-ネットでは、研修（オンブズマン養成講座）を受けた市民が2人1組となって担当施設を月2回訪問。対象は受け入れ契約をした大阪府下の高齢者施設（主に特養）約40カ所。入居利用者の話し相手になりながら出てきた要望を代弁したり、介護現場の観察を通して気づきがあれば施設に伝える活動をされています。2011年度からは対応した事例の分類や課題の明確化を図るために「事例分析

集」をまとめているそうですが、

その2017年度版を購入し、拝見しました。2017年4月から2018年3月までの施設訪問回数が計942回、面接利用者数が6135人、活動オンブズマン数が78人前後（月により増減）という規模にも驚きましたが、その中でオンブズマンが施設に伝えた事例367件を内容によって16種類に分類し、またそれぞれが改善したかどうかを分析し、その改善率を経年比較されている内容の濃さにも感心しました。

HPでの三木秀夫代表理事のメッセージには、「このような活動を通じて介護保険がめざす『市民参加』のコンセプトを社会にもっと根付かせ、介護保険を真に利用者のための制度として機能させていくことが〇-ネットのミッション」とあります。〇-ネットが相談活動、私たちは第三者評価ということで活動形態は異なりますが、めざす方向性は共通するものがあり、今後もその活動に注目していきたいと思いました。

（冬木美智子 記）



祝



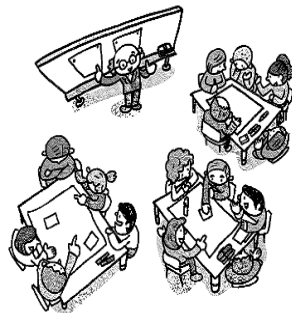
100回!

研修担当の中川慶子副理事長からのメッセージです。「毎月、こつこつと研修会を積み重ね今回で100回になります。100回を記念して団先生にご登場をお願いいたしました。これまでお世話になった諸先生方や皆様に感謝申し上げます。私は第13回からかかわっています。」

第100回 研修会 案内

「介護と家族」

「介護と家族」という身近で大きな問題を前半はレクチャー、後半はワークショップで行います。著書の販売もあります。



日時：9月28日（土） 13:30～16:30

場所：ひと・まち交流館京都 3階 第5会議室

講師：団 士郎氏（元立命館大学応用人間科学研究科 教授、現客員教授）

同志社大学を卒業後、京都府児童相談所、京都府精神薄弱者更生相談所（現知的障害者更生相談所）を経て1998年に独立。『仕事場D・A・N』を主宰。

日本全国で対人援助に関わる人々のために家族療法の研究会や講演会を行う。

【主な著書】『対人援助職のための家族理解入門』中央法規 2013年、
『家族力×相談力』文春新書 2008年 『家族の練習問題～木陰の物語～』
(1)～(7) ホンブロック 2006年～、ほか多数。

参加費：会員 300円 一般 500円

今年もやいます！第4回だまっていたらあかん！シンポジウム開催決定！

介護保険 20年！

当事者が語る「介護保険のええとこ！ 不安なとこ！」

主催：よりよい介護をつくる市民ネットワーク

日時：10月27日（日） 13:30～16:00

会場：ひと・まち交流館京都 2階 大会議室（定員300名）

コーディネーター：岡崎祐司氏（佛教大学教授）

パネリストは全員当事者・・・高齢女性、家族介護者、若年認知症、障がい者・・・

友好団体イベント案内

マイケアプラン研究会創立20周年記念公開企画

日時：9月8日（日） 10:00～16:30

会場：京都市社会福祉会館（二条城北）

内容：岩波新書『総介護社会』の著者 小竹雅子氏の記念講演、パロディ寸劇「50年後の『三人姉妹』」、グループ討論、車座トークなど。終了後は交流懇親会を予定。

参加費、申込先は同封のチラシをご覧ください。



病院や介護施設にお世話になるつもりはありません。それは父親のことでどちらも嫌うようになったからです。若い先生の経験を積む必要があるのは分かります。でも、急いでしなくてもいい手術をし、しかもその手術が失敗におわり、父は寝たきり状態で帰されました。家で老々介護が始まりました。一人っ子の私は京都から大阪へ三日にあげず通っていました。ある日、父親が言いました。「このままじゃ、お母ちゃんが倒れる」「何とかならんやろか?」と。翌朝、市役所に私は相談に行きました。担当の方のご尽力で四か月後、遠いですが高槻の病院に入ることができました。

あとは3か月おきに老健を転々とししました。ある日、5 か所目の老健から電話があり、病院に緊急入院してもらいましたとのこと。母親と病院に駆け付けたら、病院側の言うのには、延命処置の同意書にサインをしてくれとのこと。「延命処置は致しません」と私と母がいうと看護師長やら医師やらが次々とやってきて説得にあたろうとします。皆さん同じく「それなら、病院では預かれません」「出ていって下さい」と言われました。家族でいつも話し合っていたため、言い争いには負けずに済みました。父親はわがままで病院や老健の

食事をあまり口にしませんでした。だから、外出許可を取って、外食によく出かけました。亡くなる3日前も外食。カツオのたたき定食をおいしそうにぺろりと全部食べ、熱いお茶をすすりながら満足そうな顔をしていたのを今でもよく覚えています。2009年のことでした。一緒に住んでいなくても、十分お世話ができて安心してもらえたとは思っています。家族しか「幸せな」気分をあげてあげられないんだと思いました。

息子が二人います。長男は長崎、次男は金沢。ある日、大阪の元妻が胃痛で病院に行くのでついて来てほしいと細々とした声で私に電話。診察を待っているとき、元妻が息子たちのことを「一緒に暮らしていなくても、やさしく温かい言葉をもらうだけで、安心して幸せな気持ちになった」と話していました。

(「辛い」という字に「一」ちょっと足すだけで「幸せ」になれる)

私は「幸せな人生をおくるためには、いい仕事をする事だ」と信じています。最後の仕事として、私にはやりたいことがあります。それは『高齢者による高齢者のための大学』を創ることです。

会員のひろば 原稿募集

面白いこと、ためになること、こんなことしています、始めました、展覧会します、お店出します、映画の話、本の話し、ボランティア募集などなど、メール、ファックス、口頭等で情報をお寄せ下さい。お待ちしております。



編集後記

先般の早川先生のお話のように「こんなはずじゃなかった」と思うことは、日常生活の中でしばしば起こりますが、この前の参議院選挙の結果はどうでしたか?

れいわ新選組の重度の障がいをもつ二人が当選したことは、生産性云々で物議をかもした現政権への強烈なカウンターパンチです。

参議院運営委員会は「100円滑に議員活動ができるよう配慮していく」ことをいち早く決議しました。

3年前に施行された「障害者差別解消法」では、障害のある方への「合理的配慮」の提供を義務づけていますが、これを機に広まって行くといいですね。

梅雨が明けたら「こんなはずじゃなかった」というほどの厳しい暑さ!みなさま小まめな水分補給をお忘れなく。(正)